訂正中等國語讀本 落合直文編 卷十

375.9
Oc9
資料室

30299
教科書文庫
3
810
41-1902
200030
1976

資料室
398.9
Oc9
廣島大學圖書之印
廣島文理大學圖書館藏
廣島大學教
21602
圖書

訂正中等國語讀本 卷十目次

一、水無瀨殿その一……一
二、水無瀨殿その二……八
三、雁の涙（短歌）……一四
四、觀月の詞二章……一七
一、川の月……一七
二、江の月……一九
五、融その一……二四
六、融その二……二八
七、春夏秋冬四章……三三
一、雨後の花……三三

二、月前納涼……三七
三、秋雨……四一
四、雪中眺望……四四
八、いさよふ月……四七
九、父島母島（長歌）……五一
一〇、紅蓮尼……五二
一一、日野山の閑居……五七
一二、鹿野山に登る記……六四
一三、山路の物語……六九
一四、諷諭二則……七八
一、石清水詣……七八
二、獅子狛犬……七九

一五、王づさ四篇……八〇
一、小澤蘆庵主のもとに……八〇
二、人のもとより氷をわくれるに……八一
三、月の夜友のもとに……八二
四、雪の朝友のもとに……八三
一六、庭萩（長歌）……八五
一七、祭のことば……八八
一八、はれぬ雲（短歌）……九二
一九、新島守その一……九六
二〇、新島守その二……一〇三
二一、新島守その三……一一二

卷十目次終

廣島大學圖書之印

訂正中等國語讀本卷十

一、水無瀬殿 その一

建久九年正月十一日、第一の御子、土御門院四になり給ふに、御位譲り申させ給ひて、れりゐ給ふ。御年十九。位にれはしますこと、十五年なりき。けふあす、はたちばかりの御齢にて、いと、まだしかるべき御事なれども、よろづ、所せき御ありさまよりは、なかなか、やすらかに、御幸など、御心のまゝならむとにや。世をきろしめす事は、今もかはらねば、いと、めでたし。

大和国紀伊郡 鳥羽殿白河殿なども、修理せさせ給ひて、常に、渡りすませ

給へど、なほ、また、水無瀬といふところに、えもいはずれもしろき院づくりして、ちばは、かよひれはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり、世をひゞかして、あそびをのみぞ給ふ。所がらも、はるばると、川にのぞめる眺望、いと、れもしろくなむ。元久の頃、詩に、歌を合せられしも、とりわきてこそは、

見わたせば、山もとかすむ、水無瀬川、
ゆふべは秋と、なにれもひけむ。

かやぶきの廊、渡殿などは、はるばると、艶に、をかしう、せさせ給へり。御前の山より、瀧れとされたる石のたゝずまひ、苔深きみ山木に、枝さしかはしたる庭の小松も、げにげに、千代をこ

めたる霞の洞なり。

今の御門の御諱は、爲仁と申しき。攝政は、院の御時の關白基通のれとゞ、その後は、後京極殿良經ときこえ給ひし、いと、久しくれはしき。このれとゞは、いみじき歌のひじりにて、院のうへ、れなじ御心に、和歌の道をぞ、申し行はせ給ひける。文治の頃、千載集ありしかど、院、いまだ、きびはにれはしましゝかばにや、御製も見えざめるを、當帝、位の御程に、また、集めさせ給ふ。土御門の內のれとゞの二郎君、右衞門督通具といふ人をはじめにて、有家の三位、定家の中將、家隆、雅經などに、のたまはせて、昔より今までの歌を、ひろく、集めらるゝれのれの奉れる歌を、院の御前にて、みづから、みがきとゝのへさせ給ふ

さま、いと、めづらしく、れもしろし。この時も、さきに聞えつる攝政殿、とりもちて、行はせ給ふ。

れほかた、いにしへ、奈良の御門の御代に、はじめて、左大臣橘の朝臣、勅をうけたまはりて、萬葉集を撰びしよりこのかた、延喜のひじりの御時の古今集、友則、貫之、躬恒、忠岑。天暦のかしこかりし御代にも、一條攝政殿、謙德公いまだ、藏人の少將など聞えける頃、和歌所の別當とかやにて、梨壺の五人にれほせられて、後撰集は、集められけるとぞ。ひがぎきにや侍らむ。その後、拾遺集は、花山法皇の、みづから、撰ばせ給へるとぞ。白河院、位の御時は、後拾遺集、通俊治部卿、うけたまはる。崇德院の詞花集は、顯輔三位、えらぶ。また、白河院れりゐさせ給ひてのち、金葉集、かさねて、俊頼の朝臣にれほせて、撰ばせ給ふ。はじめ奏したりけるに、輔仁の親王の御なのりを書きたる、わろしとて、なほされ、また、奉れるにも、何事とかやありて、三度奏してこそ、をさまりにけれ。かやうのためしも、れのづからの御事なり。れしなべて、撰者のまゝにて侍るなれど、こたみは、院のうへ、みづから、和歌の浦にれりたち、あさらせ給へば、まことに、心ことなるべし。

この撰集よりさきに、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、すぐれたるかぎりを、撰ばせ給ひて、その道のひじりたち、判じたるに、やがて、院もくはゝらせ給ひながら、「なほ、このなみには、たちれよびがたし」と、びげせさせ給ひて、判のことばを

ば、志るされず、御歌にて、まさり劣れる志ばかりを、あらはし給へり。なかなか、いと、艶に侍りにけり。

上の、その道を得給へれば、下も、れのづから、時を知るならひにや、男も、女も、この御代にあたりて、よき歌よみ、れほく、聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の御門の御後に、俊房の左のれとゞと聞えし人の御末なれば、はやうは、あて人なれど、つかさ淺くて、うち續き、四位ばかりにてうせにし人の子なり。まだ、いと、若きよはひにて、そこひなく、深き心ばへをのみよみしこそ、いと、ありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院のうへ、のたまふやう、「こたみは、皆、世にゆりたる、ふるき道のものどもなり。宮内卿は、まだしかるべけれ

ども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。かまへて、まろがれもてれこすばかり、よき歌つかうまつれ」と、れほせらるゝに、れもて、うち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしき、かぎりなきすきのほども、あはれにぞ見えける。さて、その御百首の歌、いづれも、とりどりなる中に、

うすくこき、野邊の綠の、若草に、
あとまで見ゆる、雪のむらぎえ。

草のみどりの、こきうすき色にて、去年のふる雪の、遲く、とく、消えけるほどを、推しはかりたる心ばへなど、まだしからむ人は、いと、思ひよりがたくや。この人、年つもるまで、あらましかば、げに、いかばかり、目に見えぬ鬼神をも動し、なましに、若

くて、失せにし、いと、いとほしく、あたらしくなむ。

かくて、この度、撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二年三月二十六日、竟宴といふ事、春日殿にて、行はせ給ふ。いみじき世のひゞきなり。

二、水無瀬殿 その二

かくて、院のうへは、ともすれば、水無瀬殿にのみ渡らせ給ひて、琴笛の音につけ、花もみぢのをりをりにふれて、よろづのあそびわざをのみつくしつゝ、御心ゆくさまにて、過させ給ふ。まことに、よろづ世もつきすまじき御世のさかえ、つぎつぎ、今より、いと、たのもしげにぞ、見えさせ給ふ。

御碁うたせ給ふついでに、若き殿上人ども召して、これかれ、心のひきびきに、いどみ爭はせさせ給へば、あるは、小弓、雙六などいふ事まで、思ひ思ひに、勝負を、さうどきあへるも、いと、をかしう御覽じて、さまざまの興ある賭物ども、とりでさせ給ふとて、なにがしの中將を、御使にて、修明門院の御方へ、「何にても、をのこどもに、賜はせぬべからむ賭物」と、申させ給ひたるに、とりあへず、小き唐櫃の、金物ゐたるが、いと、重らかなるを、參らせられたり。この御使のうへ人、何ならむと、いと、いぶかしくて、片端、ほのあけて見るに、錢なり。いと、心えずなりて、さと、れもてうちあかめて、あさましと思へる氣色ゐるを、院御覽じれこせて、「朝臣こそ、むげに、口惜しくはありけ

れ。かばかりの事、知らぬやうやはある。いにしへより、殿上の賭弓といふ事には、これをこそ、かけ物にはせしか。されば、今、かけものと聞えたるに、これをしも、いだされたるなど、いにしへの事知り給へるこそ、いたきわざなれ（エライ）」と、ほゝゑみて、のたまふに、さは、あしく思ひけりと、心ち騒ぎて、れぼゆべし。

れほかた、この院のうへは、よろづの事に、いたりふかく、御心もはなやかに、物にくはしうぞ、れはしましける。夏の頃、水無瀬殿の釣殿（池ニ望ミタル殿殿）にいでさて給ひて、氷水（ヒミヅ。白キ氷也）めして、水飯やうのものなど、わかき上達部、殿上人どもに、たまはせて、大御酒まゐるついでにも、『あはれ、いにしへの紫式部こそは、いみじくはありけれ。かの源氏物語にも、「ちかき川（鴨川ヨコフ）のあゆ、西川（桂川）より奉れ

るいしぶしやうのもの、御前（川奥也）にて、調じて」と、かけるなむ、すぐれて、めでたきぞとよ。たゞいま、さやうの料理、つかまつりてむや』など、のたまふを、秦の某とかいふ御隨身、高欄のもとちかく侍ひけるが、うけたまはりて、池の汀なる笹を、すこし、去きて、白き米を洗ひて、奉れり。「ひろはゞ、消えなむとにや、これも、けしかるわざかな」とて、御衣（ミゾ）ぬぎて、かづけさせ給ふ。御かはらけ（瓦器、酒也）、たびたび、きこしめす。その道にも、いと、はしたなう、もの、し給ふ。何事も、あいぎやう（愛敬ニテ、ヌキ、）づき、めでたく見えさせ給ふ御ありさま、千とせを經とも、あく世あるまじかめり。

また、清撰の御歌合とて、かぎりなく、みがかせ給ひしも、水無瀬殿にての事なりしにや。當座の衆議判なれば、人々の心

ち、いとゞ、れきどころなかりけむかし。建保二年九月の頃、すぐれたるかぎり、ぬきいで給ふめりしかば、いづれか、れろかならむ。中にも、いみじかりし事は、第七番に、左、院の御歌、

おかしがた、浦路はれゆく、朝なぎに、
きりにこぎいる、あまのつりぶね。

と、ありしに、北面の中に、藤原秀能とて、とし（年表）ごろも、この道にゆりたるすきものなれば、召し加へらるゝ事、常のことなれど、やんごとなき人々の歌だにも、あるは、一首、二首、三首にはすぎざりしに、この秀能、九首まで召されて、おかも、院の御かたてにまゐれり。さて、ありつるあまの釣舟の御歌の右に、

契（約束）りれきし、山の木の葉の、下もみぢ、

そめしころもに、あきかせぞふく。

と、よめりしは、その身の上にとりて、ながき世のめんぼく、何かはあらむとぞ、聞き侍りし。昔の躬恒が、御はしのもとに召されて、「ゆみはりとしも、いふ事は」と、奏して、御衣たまはりしをこそ、いみじきことには、いひ傳ふめれ。また、貫之が家に、九條のれとゞ、魚袋の歌のかへしとぶらひに、れはしたりしをも、道の高名とこそ、世繼には、書きてはべれ。ちかき頃は、西行法師ぞ、北面のものにて、世にいみじき歌のひじりなりしが、今の代の秀能は、ほとほと、ふるきにもたちまさりてや侍らむ。（増鏡）

三、雁の涙

題しらず　　讀人しらず

なきわたる、かりの涙や、れちつらむ。
　　ものれもふやどの、萩の上の露。

秋立つ日、うへのをのこども、賀茂の河原に、川せうえうしけるともに、まかりてよめる。　　紀貫之

川風の、涼しくもあるかうちよする、
　　涙とゝもにや、あきは立つらむ。

題しらず　　讀人しらず

しら雲に、はねうちかはし、とぶ雁の、

かずさへ見ゆる、あきの夜の月。
　　是貞のみこの家の歌合の歌、　壬生忠岑

山ざとは、秋こそことに、わびしけれ。
　　鹿のなくねに、めをさましつゝ。

ながの月の、つごもりの日、大井にてよめる。　　紀貫之

夕月夜、をぐらのやまに、なくしかの、
　　こゑのうちにや、秋はくるらむ。

内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の繪かける、うしろの屏風に、かきたりける。　　凡河内躬恒

すみの江の、松をあき風、ふくからに、
こゑうちそふる、れきつまら涙。

讀人まらず

題まらず

われ見ても、ひさしくなりぬ。住吉の、
岸のひめまつ、いくよへぬらむ。

讀人まらず

題まらず

わが庵は、三輪の山もと。こひしくば、
とぶらひきませ。松たてるかど。

讀人まらず

題まらず

風ふけば、れきつまらなみ、たつた山、
夜半にや君が、ひとりこゆらむ。

四、觀月の詞二章

（古今和歌集）

一、川の月

いつはあれど、照る月の秋のさかり、いづこはあれど、行く水の隅田川に、夕波のふた國かけたる月見むとて、唐大和の文人、絲竹にしもたへたるをつらねて、浮ぶ事あり。舟は、汐のまにまに、棹ならずして上り、岸は、舟のまにまに、居ながらにしてぞうつる。岸、はるかに、晴れて、百の臺に、簾をまき、風、まづかに、吹きて千々の舟の、とばりをうごかせり。これや、この蘆荻を分けつる國にやあるらむ。都鳥に言問ひける川にぞあるらし。時のゆければ、かゝる都にしも、なりにけることを、あ

るは、目によろこび、心に驚き、あるは、醉ひなきして、今をほめ、歌志のびして、古をなむかたらひける。時に、或人のいへらく、『わがみかどに、隅田川てふ川こそ多けれ。うちよする駿河なる、大鳥の出羽なる、この武藏なるは、古の言の葉の集には、「下つ總のあはひ」と、書かれ、後の道行ぶりの日記には、「相模の境なり」とぞ、志るしける。いでや、月待つほどのなぐさめに、人々、この事、定め給はむなり』と、いへば、あるが中に、獨、あげつらふことは、「それ、古の集は、後の人の、筆を加へたるあり、後の日記は、野らに問ひて、志るすことあれば、よるべきものゝ、なづむべからざるをや。そもそも、蘆荻を分けつらむ、都鳥にことゝひけむ、蘆荻は、人草の志げらむ、さがにして、鳥の名は、都とな

らむ志るしにぞありけらし。志かあれば、かゝる都のうちに、流るゝ川をしも、絶えせぬ御世の例にも引き、ふりにし名所のよすがにもいふべきなりけり」と、いひ終ふれば、まちとりて、物の音をわなゝかし、すみ上る月に、うそぶきいでたる、いづれのところにか志かむ。いつの時にかは、忘れまし。すなはち、舟こぞりて、かしこければ、今宵のありさま、述べつくすべし。たゞ、我ひとり、醉ふ。かゝれば、何の心かいはむ。

わたつみの、夕汐のぼる、隅田川、
月のそらまで、ふねもゆかなむ。

（賀茂眞淵著縣居家集）

二、江の月

秋たけ、霜ふりて、つゞりさせてふ蟲の聲も、いそがはしげなる頃、月見むとて、なにがしの入江に舟をうかべぬ。さるは、いにし八月の頃と、思ひたちしかど、ことさげくして、なにくれと、たゆたふほど、長月のかげ、有明になりなむとするに、今日しも、夕つかたより、時雨の雲、殘りなく晴れて、寢待の月、きらめきいでぬ。ゆくりなく、いで立たむも、あわたゞしきやうなれど、隈なき光に催されて、思ひたちたるなりけり。いざなふべき友をたれかれと、思ひめぐらすに、なまじひに、れどろかして、「夜更けぬ、道遠し」など、つぶやき、さぶさぶならば、口をしからましよしや、ひとり、ものせむには、さかじとて、例の瓢ばかりを、れくれぬ友にて、たちいづ。まづ、心あての、船長をれ

どろかすに、寢れびれたる聲して、帶、ないがしろに、引きまとひつゝ、いで來ぬ。「をりしもこそあれ、かゝる夜寒に、宵すごして、れはしましつることよ」と、いふれもゝち、すさまじげなるものから、腰のひさごの大なるに、目をやとゞめけむ、舟よそひして、漕ぎいでぬ。水のほとり、秋さび、人げすくなく、まして、夜さへ更けたれば、ものすごしなど、いはむも、なかなかなり。蘆の葉を吹く風は、雪よりもけに、ちりみだれ、月のひかりは、白銀をさきたらむやうに、涙の上に、きらめきたり。まづ、かの瓢をとり出でて、舟長に杯とらするほど、舟は、涙のまにまに流れ行くめり。「いでや、かうやうのをりに、月見るこそ、まことの風流とはいはめ」など、聞きも知らぬ船長に、うちかたらひ

つゝ、

水馴棹、さしていでずば、浪の上に、
　　ひとりや月の、すみあかさまし。

と、ほこりがに、うそぶくほど、かたへの蘆原に、聲ありて、

すみ渡る、月の御舟の、ともぶねに、
　　こぎれくれたる、人もありけり。

と、いふに、むくつけきまゝ、眼をれほきになして、そこら、見めぐらせば、小船一艘、月のまへに、漕ぎ出でたり。誰ならむと、さしよせて見れば、先に、いざなはゞやと思ひし、友になむありける。れどろきて、「なぞ、かく、ひとりは」と、問ふに、『さりや、先に、そこの從者の、酒買ふとて、瓢うちかたげて、はしり行くにあひて、「いかなる客人ありてか、いそがはしげなる」と、問ひしに、「客人は、さぶらはず。わが殿、今しも、なにがしの入江に、月見になむれはしますなる。かゝる夜寒に、いと、ものぐるほしきこと」とて、行き過ぎぬ。さては、さきつ頃、思ひたゝれぬと聞きしは、今宵なりけりと、思ふに、れくらかされぬるこそ、ねたましけれ。いで、とくとく、杯を』と、いふに、せんぜられぬるは、ねたきものから、うれしくて、船長に、むやひせさせて、かたみに、船端にれしかゝりつゝ、酒汲みかはし、やうやう、醉のくはゝりもて行きて、「酒あれども、肴なし。月白く、風清し」など、舷を叩きて、うちあげ、歌ふほど、村雲、はしたなく、れほひかゝりて、時雨、あわたゞしう、うちそゝぎ、風さへ、くはゝりたれば、むやひの綱手

も、れのづから、ひきはなれて、こぎわかれぬ。はては、いかゞなりにけむ。（野矢常方著　蓼園集）

五、融　その一

「これは、東國方より出でたる僧にて候ふ。われ、未だ、都を見ず候ふほどに、このたび、思ひたち、都に上り候ふ。」思ひたつ心ぞ、まるべ、雲を分け、舟路を渡り、山を越え、千里も同じ、ひと足に、夕をかさね、朝ごとの、宿のなごりも、かさなりて、都にはやく、着きにけり。「いそぎ候ふほどに、これは、はや、都に着きて候ふ。まばらく休らひ、一見せばやと、思ひ候ふ。

「月もはや、出汐になりて、鹽竈の、うらさび渡る氣色かな。陸

奥は、いづくはあれど、鹽竈の、うらみて渡る、老が身の、よるべもいさや、定めなき。心も澄める、水の面に、照る月なみを、數ふれば、今宵ぞ秋の、最中なる。げにや移せば、鹽竈の、月も都の、最中かな。秋は半、身は既に、老い重りて、もろ白髮、雪とのみ、積りぞ來ぬる、年月の、春を迎へ、秋を添へ、まぐるゝ松の、風までも、わが身の上と、汲みて知る、汐馴衣、袖寒き、浦わの秋の、夕かな。

「いかに、これなる尉殿、御身は、このあたりの人か。」「さん候ふ。この處の汐汲にて候ふ。」「不思議や、こゝは、海邊にてもなきに、汐汲とは誤りたるか、尉殿。」「あら、何ともなや。さて、こゝをば、いづくとまろし召されて候ふぞ。」「この處をは、六條河原の院とこそ、承りて候へ。」「河原の院こそ、鹽竈の浦候ふよ。融の大臣、み

ちのくの千賀の鹽竈を、都の内に移されたる海邊なれば、名に流れたる河原の院の、河水をも汲め、池水をも汲め、こゝ鹽竈の浦人なれば、汐汲と、などれぼさぬぞや。「げにげに、みちのくの千賀の鹽竈を、都の内に移されたること、承り及び候ふ。さては、あれなるは、籬が島候ふか。「さん候ふ。あれこそ、籬が島候ふよ。融の大臣、常は、御舟を寄せられ、御酒宴の遊舞さまざまなりし所ぞかし。や、月こそ出でて候へ。「げにげに、月の出でて候ふぞや。あの籬が島の森の梢に、鳥の宿し囀りて、詩文にうつる月影までも、孤舟に歸る身の上かと、思ひ出でられて候ふ。「何と、たゞ今の面前のけしきが、御僧の御身に知らるゝとは、もしも、賈島がことばやらむ。「鳥は宿す池中の樹、僧は敲く月下の門」「推すも、敲くも」「古人の心。「今、目前の秋暮にあり。「げにや、いにしへも、月にはちがの、鹽竈の、浦わの秋も、半にて、松風も、たつなりや。霧の籬の、島がくれ、いざ、われも、たちわたり、昔の跡を、みちのくの、千賀の浦わを、ながめむや。千賀の浦わを、ながめむ。

「鹽竈の浦を、都の内に移されたるいはれ、御物語り候へ。「嵯峨天皇の御宇に、融の大臣、みちのくの千賀の鹽竈の眺望を、きこしめしれよばせ給ひ、この處に、鹽竈を移し、あの難波の御津の浦よりも、日ごとに、汐を汲ませ、こゝにて、鹽を燒かせつゝ、一生御遊のたよりとぞ給ふ。然れども、その後は、相續して翫ぶ人もなければ、浦は、そのまゝ、干汐となつて、池邊によ

どむ、溜水は、雨ののこりの、ふるき江に、れち葉ちり浮く、松かげの、月だにすまで、秋風の、音のみのこる、ばかりなり。されば、歌にも、「君まさで、烟絶えにし、鹽竈の、うらさびしくも、見えわたるかな」と、貫之も、ながめて候ふ。「げにや、ながむれば、月のみ滿てる、鹽竈の、うらさびしくも、荒れはつる、あとの世までも、志ほぎみて、老の波も、歸るやらむ。あら、むかし戀しや、戀しやと、慕へども、歎けども、かひもなぎさの、浦千鳥、音をのみ鳴く、ばかりなり。

六、融　その二

「いかに、尉殿、見えわたりたる山々は、皆、名所にてぞ候ふらむ。御教へ候へ。」「さん候ふ。皆、名所にて候ふ。御たづね候へ。教へ申し候ふべし。」「まづ、あれに見えたるは、音羽山候ふか。」「さん候ふ。あれこそ、音羽山候ふよ。」「音羽山、音に聞きつゝ、あふ阪の、關のこなたに」とよみたれば、逢阪山も、程近うこそ候ふらめ。」「仰の如く、關のこなたにと、よみたれども、かなたにあたれば、逢阪の山は、音羽の峰にかくれて、この邊よりは、見えぬなり。」「さてさて、音羽の峯つゞき、次第次第の山なみの、名所名所を、語り給へ。」「語りもつくさじ、ことのはの、歌の中山清閑寺、今熊野とは、あれぞかし。」「さて、その末につゞきたる、里ひとむらの、森の木立。」「それを志るべに、御覽ぜよ。まだき志ぐれの、秋なれば、紅葉も青き、稻荷山。」「風もくれゆく、雲のはの、梢も青き、秋の色。

「今こそ秋よ、名にしれふ、春は花見し、藤の森。緑の空も、かげ青き、野山につゞく、里はいかに。「あれこそ、夕されば、「野邊の秋風、「身にしみて、「うづら鳴くなる、「深草山よ。「木幡山、伏見野、竹田、淀、鳥羽も見えたりや。

「ながめやる、そなたの空は、しら雲の、はや、くれそむる遠山の、峰もこぶかく見えたるは、いかなる所なるやらむ。「あれこそ、大原や、小鹽の山も、けふこそは、御覽じそめつらめ。なほなほ、問はせ給へや。「聞くにつけても、秋の風、吹く方なれや、峰つづき、西に見ゆるは、いづくぞ。「秋もはや、半ふけゆく、松の尾の、嵐山も見えたり。「嵐ふけゆく、秋の夜の、空すみ上る、月影に、「さす汐時も、はや過ぎて、「ひまもれし照る月にめで、「興に乘じて、

「身をば、げに、忘れたり。秋の夜の、長物語、よしなや、まづいざや、汐を汲まむとて、持つや田子の浦、東からげの、汐衣、汲めば月をも、袖にもちぞほの、汐にかへる、波のよるの、老人と見えつるが、汐ぐもりに、かきまぎれて、あとも見えず、なりにけり。あとをも見せず、なりにけり。

「磯枕、苔の衣を、かたしきて、岩根の床に、夜もすがら、なほも奇特を、見るやとて、夢まち顔の、旅寐かな。

「忘れて年を、經しものを、又いにしへに、かへる波の、みつしほがまの、浦人の、こよひの月を、みちのくの、千賀の浦わも、遠き世に、その名を殘す、まうちぎみ、融の大臣とは、わがことなり。われ、鹽竈の浦に、心を寄せ、あの籬が島の、松かげに、明月に、

舟を浮べ、月宮殿の、白衣の袖も、三五夜中の、新月の色、千重ふるや、雪をめぐらす、雲の袖。「さすや桂の、枝々に、「光を花と、ちらすよそひ、「こゝにも名に立つ、白河の波の、「あられもまろや、曲水の盃「うけたり、うけたり、遊舞の袖。

「あられもまろの遊樂や、そも、明月のその中に、まだ、はつ月の、よひよひに、影も姿も、少きは、いかなるいはれなるらむ。「それは、西岫に、入日の未だ、近ければ、その影にかくさるゝ、たとへば、月のある夜は、星の薄きが如くなり。「青陽の春のはじめには、「かすむ夕の遠山「黛の色にみか月の、「影を舟にもたとへたり。「又、水中の遊魚は、「鈎と疑ふ。「雲上の飛鳥は、「弓の影とも驚く。「一輪も降らず、「萬水も昇らず。「鳥は、池邊の樹に宿し、「魚は、月

三五夜中
白樂天ノ詩ニ
三五夜中新月色、
二千里外故人心

題桂ノ宮　源施
秋ハ月ノ桂ノ実ヤハ
ある、実を花とすりはすば
すりで

明太祖ノ詩ニ
映水有鈎、巣枝鈎
御ノ山無箭鳥疑弓

下の波に伏す。「聞くともあかじ、秋の夜の、「鳥も鳴き、「鐘も聞えて、「月もはや、「影傾きて、あけ方の、雲となり、雨となる、この光陰にさそはれて、月の都に入り給ふよそひ、あら、なごりをしの面影やなごり惜しの面影。（謠曲集）

七、春夏秋冬四章

一、雨後の花

今日は、いと、のどかなり。いでや、隅田河原の花みむと、小船に乗りて、行きたるが、花見むと、たち出づるもろ人のさま、げに、都のみやびを盡せり。さまざまの心々に、うちむきて行くに、女房なども、なにか、口たゝきつゝ、心そらに、ありくもあり。

源氏物語ニ、
雪とのみ雨とぞふるる
今日知らず

馬馳せて、花をも、目にかけず、いとばうぞくに、行くもあり。やごとなき人にや、人々、うちかこみて、つゝましげに、行く女もあり。あるは、木陰にて、はや、ひさごかたぶけ、なにやらむ、矢立いだし、かいつけ、かうよりして、花の枝につけて、われはがほなる風情なるもあり。今日は、げに、はれにはれて、一天に、雲なく、富士も、筑波も、手にとるばかりに、見えたれど、それを、うち眺むる人もなし。ましてかく、晴れたる日は、とみに、雨風のあるなどいふことは、露、思ふものもあらじかしなど、思ひて、四方を、ふと、うち見れば、筑波根のあたり、いと、細く、ひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世にいふ、はやてなどいふものなりけり。あまりに、朝よりめづらしく晴れたる日なればと

て、かねて、蓑も笠も放たで居しが、はや、櫓をたたて漕ぎかへるを、「いかに、この花を見すてゝかへるは、かりがねに、つらさやならへる。櫓の音ばかり學べよかし」など、口々に笑ふを、耳にも入れで、漕ぎ去りぬ。いつか、その雲の、いと、ひろごりてけるが、かのともがらは、露も知らず、日のかげろふも知らず、今日は、あつきばかりなりとて、肌ぬぐもあり。又は、衣などぬぎて、はせありくもありぬべし。雨にさきだつ風の、一とほり、吹き落ちたれば、こは、花よと思ふほどもなく、いさご吹きたてたれば、たゞ、驚きて居るがうちに、雨のふりいでたり。はじめは、こゝちよき雨などとも、いひたらむが、後には、人の聲に、雨の音もせず、馬を馳せて、歸るもあれば、驚きあわてゝ、堤より

まろびて、落つるもあり。女などは、いと、いたう、みぐるしきまで、あわてふためきて、はじめ裝ひしをも、みづから、夢とや思ふらむさまなる。まして、酒に醉ひて、ぬるゝもさらずがほに、笑ひなどするもあれば、「思ひよらぬれろかなる雨かな」と、怒り罵るもあり。ほかの船は、早く、漕ぎ行きぬれど、わが住む浦は、遠ければ、とある橋の下に、船とめて居しが、橋の上など、人の走り騒ぐは、なる神のやうに聞えぬ。はや、雨もかぞふるばかりに、川の面に見ゆるころ、夕月の、ことさらに、あたらしくみがき出でたれば、はや、雨のなごりもなし。堤の花、いかゞあらむと、漕ぎ返して見れば、その頃は、はや、人もなし。櫻の木の間に、ほのぼのと、月の見えたるは、わがために、つくりなしけむと、思ふばかりなり。ぬれにし人は、いかゞさたりけむ、この月などは、思ひもよらでありむなど、ひとり思ふも、何となく、心れごりゆきぬ。かぞいろも、「われひとり、人にこえて、心地よしと思ふ時は」と、戒め給ひたれば、また、あやまちさぬべくと、れそろしく覺えければ、飲み殘したる酒携へて、つひに、漕ぎかへりぬ。（松平定信著花月草紙）

二、月前納涼

みな月の廿日のほど、れほかたも、この頃は、あつさ、ところせきほどなるを、まいて、朝より、塵ばかりも、くもりなく、照りはたゝく日影の、西日になるほどよに、堪へがたくて、思ふどち、うちとけたる物語をだにして、まぎらはさばやと思ひて、

むつましく、あひ語らふ友だちのもとに、ものしつ。なきほどにやあらむと、れぼつかなく、思ひしも志るく、「今日は、ものへなむまかりぬる」と、いふに、いと、口をしくて、歸りなむとするほど、この主人、かへり來て、まづ、見るより、今日のあつさを、かへすがへす、いひつゞけ、汗、れしのごひ、扇、うちならしつゝ、ともなひ入る。南れもてなるところ、伊豫簾かけわたし、あたりあたり、いと、さはらかに、志つらひたる、いと、涼しげなるに、夕風、待ちとるべきはしつかたに、つい居たるに、かつ、あつさも忘るゝ心ちして、簀子のはしに出でて、見いだせば、庭の梢ども、いづれとなく、志げりあひたるものから、木立、うとましからぬほどに、つくろひなして、このもかのもに、はかなき

柴垣、なつかしく、ゆひ渡しなど、志めやかに、見どころあるさまなり。夕つけゆくほど、軒近く、吳竹の下風、心もとなきほどに、うちそよめきたるも、あかぬこゝちのみぞせらるゝ。さうざうしかりつるに、いと、嬉しくて、はかなき物語、いま一きは、心ゆくこゝちす。「心へだてぬどちのまとゐは、なべて、うちとけたるなむよきを、まして、かく、あつきには、いかでか、かしこまりも、れきあへ侍らむ。無禮の罪は、ゆるされなむ」とて、なほなほ、帶なども、ときちらしぬべし。主人、なさけある人にて、庭のたて石などに、水そゝがせたる、名殘れぼえて、木々の下枝うちなびき、落つる雫も、いひ志らず、涼しく見ゆ。やうやう、內外くらくなり行くに、さゝやかなる童の出で來て、燈火、近く

ともせば「いでや、けぢかくて、いと、あつかはし。今宵は、燈籠にてありなむ。この火、けちてよ」と、いふ。「げに、さも侍らむ」とて、たちて、去りぬる程もなく、前栽の志げみにたてるに、火いれたる、ほのかなる影に、青葉の露、きらきらと見えて、同じく吹く風も、ことに、涼しくぞれぼゆる。「夏の月なきほどは、庭のひかりなき、いと、むつかしく、れぼつかなきものなるを、この光なからましかば、いと、物のはえなからましを」とて、皆人、めでありるに、主人の、志たりがほなるも、ことわりなりかし。かくて、よひ過ぐるほど、木高き松に、ほのめく影は、月出でたるならむとて、東の妻戸、れしひらきて、待つほど、とばかりありて、いと、はなやかに、さし出でたるは、又、似る物なく、涼しくれも志ろく、燈籠の光も、今ぞ、むとくに消たれにたる風さへ、いと、ひやゝかに、うち吹きたるは、「ふる川のべの杉の下陰」ならねども、「秋やかへりて」などうちずしのゝしる。大かた、月は、秋をこそめでたき時に、古より、いひれきためれど、この頃の空に、かくて、待ち出でたるほどよ、たとしへなく、心もすみて、物むつかしさも、こよなく、まぎるゝわざになむ。（本居宣長著鈴の屋集）

三、　秋雨

八月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくして、例の隅田川のほとり、石濱の庵に行きて、宿りぬ。有明の月の匂も、霧立ちわたる曙のさまも、ところがら、世にも似ぬものから、こは、雨のそぼ降る日なむ、ことに、あはれ深かりける。もとよ

り、茅葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫の、みつよつ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろほろとちるも、あはれなり。水の面は、動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮び、かつ消ゆるみなわにこそ、雨のけはひは、まるかりけれ。みをの一すぢは、さしひく汐にもまじらはで、とはに、花田の色に流れいにて、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならむ、打ち向ふ岸のはり原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、はゝその黄ばみたるは、さすがに、ほのかに見えて、そのひまびまより、長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やうやうに、淡墨もて、かきけちたらむが如く、いとしも遙けきは、たゞ、なびかぬ烟とのみぞ見ゆる。こゝかしこより、鳥の飛び行きつゝ、塒の鷺の、翅れもげに起き出で、河の瀬のまこもに、下り立てば、みさごの群れきて、水の雨に浮べるも、をかし。上つ瀬より、筏師の蓑笠着て、棹を筏の上によこたへ、れのれたむだきて、思ふ事なげにて居り。筏は、水のまにまに、流れゆくも、志づけし。渡守、舟さしいだせば、大笠かたぶけて、渡り行く人の、やがて、堤をありくありさまも、繪に、よく似たり。すべて、ひと日のうちに、筑波根より、吹きれろすと思へば、沖よりも、風、かよひきて、岸の木立も、長き堤も、あるは、あらはれ、あるは、かくれて、かぎりなき青海原に向ひたらむやうに、覺ゆるをりもありけり。かくて、やゝ、夕暮近くなりゆけば、むら鳥の、れのがじし、塒

もとむるに、雁の、ひとつら、ふたつら、わたり行くなど、えもいはむかたなし。暮れはてゝも、猶も、行く水の色のみ、とほく、のこりて、川ぞひ小田にいはへる、みくまりの神の御火の、海人の漁火ともいふべく、かすかに、見えわたるも、あはれなり。

秋ふけて、こさめそぼふる、隅田川、
たが墨がきの、すさびなるらむ。

（橘千蔭著うけらが花）

四、雪中眺望

をりかこふ柴の籬も、山となりて、隣をへだて、竹の下道、あとたえて、訪ふ人もなし。あな、さぶしや」と、いふほどに「世にうもるゝわびずみの心やりには、酒こそよけれ」と妹なねがほださしくべ、瓶の志りゝ、たきくろめて、勸むるに、軒は、くもれど、心は、すこし、晴れぬ。醉ふとはなしに、うかれいでて、手飼の駒に、はひ乘るに、かき掃はぬ蓬が庭も、玉志きわたし、枯れたる木どもゝ、花咲きぬれば、野邊のあたりやいかならむと、鞭うつ駒の行きのまにまに、走り出の堤にのぼりて、見さくるに、天地のそくへのきはみ、眞白にて、たゞ、刀根の川浪一すぢぞ、黑く、流れたる。

野も山も、雪にくまなく、ちかよりて、
刀根のながれの、かぎりをぞ見る。

水上の新田、秩父、五百重山、千重たゝなづく群山を、何の山、くれの山と、數へもてゆくに、遙けき峰より、け近く、烟のたち上

るも、めづらしや。ひとり、思ひあがりて、なずらふべき山のなきにぞ、なにがしの嶽とは知らるゝ。「心だかくも」とこそは、いはまほしけれ。名だゝる高嶺は、時じくものから、つぎてふりたく大雪に、この出で立てる見わたしより、武藏野の大野のきはみ、遠白く、麓につゞきて、天にはゞかる大傘を、なかば、開きたるさまに、さし出でたるが、なほ、めづらしくて、うつら、うつら、見つゝしをれば、駒の口は、れさへとゞめながら、心は、空になむ行きける。

降る雪に、片ひらきなる、大かさを、
　さしてたゝせる、富士のたちやま。

などと、ひとりごちたるほどに、一杯の酒もさめて、すゞろ、寒

くなりぬれば、駒ひきむけて、かへりなむとす。（橘守部家集）

八、いざよふ月

むかし、壁の中より、もとめいでたりけむ、ふみの名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも、身の上のことゝは、たちざりけりな。みづくきの岡のくず葉、かへすがへすも、かきれくあと、たしかなれども、かひなきものは、親のいさめなりけり。また、賢王の、人をすてたまはぬまつりごとにも漏れ、忠臣の、世をれもふなさけにもすてらるゝものは、かずならぬ身ひとつなりけりと、れもひたりながら、また、さてしもあらで、なほ、このうれへこそ、やるかたなく、悲しけれ。

さらに、思ひつゞくれば、やまと歌の道は、たゞ、まことすくなく、あだなるすさびばかりと、れもふ人もやあらむ。日の本の國に、天の岩戸ひらけし時、よもの神たちの、神樂のことばをはじめて、世を治め、物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道のひじりたちは、志るしれかれたりける。さても、また、集をえらぶ人は、ためしれほかれど、二たび、勅をうけて、代々にきこえあげたる家は、たぐひ、なほ、ありがたくやありけむ。そのあとにしも、たづさはりて、三たりのをのこども、もゝちの歌ふる反古どもを、いかなるえにかありけむ、あづかりもたることあれど、「道をたすけ、子をはぐくめ、後の世をとへ」とて、ふかきちぎりをむすびれかれし、細川のながれも、

ゆゑなく、せきとゞめられしかば、跡とふ法のともし火も、道をまもり、家をたすけむ、親子のいのちも、もろともに、きえをあらそふ年月を經て、あやふく、心ぼそきものから、何として、つれなく、今日まではながらふらむ。をしからぬ身ひとつは、やすく、思ひすつれども、子を思ふ心のやみは、なほ、忍びがたく、道をかへりみるうらみは、やらむかたなく、さても、なほ、あづまの龜の鏡にうつさばくもらぬ影もやあらはるゝと、せめて、思ひあまりて、よろづのはゞかりを忘れ、身をえうなき物になしはてゝ、ゆくりもなく、いざよふ月に、さそはれいでなむとぞ思ひなりぬる。

ころは、みふゆたづ、はじめの、さだめなき空なれば、ふりみ、

ふらずみ、時雨もたえず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に、みだれちりつゝ、事にふれて、心ぼそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとても、とゞまるべきにもあらで、なにとなく、いそぎ立ちぬ。めかれせざりつるほどだに、荒れまさりつる、庭もまがきも、ましてと、見まはされて、志たはしげなる人々の袖の雫も、なぐさめかねたる中にも、侍從、大夫などの、あながちに、うち屈したるさま、いと、こゝろぐるしければ、さまざま、いひこしらへ、閨のうちを見れば、昔の枕さへ、さながら、かはらぬを見るにも、今さら、かなしくて、かたはらにかきつく。

とゞめれく、ふるき枕の塵をだに、

われたちさらば、誰か掃らはむ。

（十六夜日記）

九、父島母島（渡邊重春）

白眞弓　伊豆の國より、
五百重なみ、　千重波へなる、
ひむがしの、　みなみの海に、
ちゝじまは、　ありといふなり、
はゝじまは、　ありときくなり、
ちゝの實の、　父の命を、
志たふがね、　かくや名づけし、
柞葉の、　母の命を、

またふがね、　まかやいひける、
ちゝはゝに、　われはまな子、
はゝちゝに、　われはめづ子、
璞玉の、　月日めぐりて、
きさらぎの、　五日のけふに、
逢ふごとに、　いとゞくるしゑ、
近からば、　いゆき見ましを、
名をきくも、　うらなつかしき、
父島母島。

一〇、紅蓮尼

名もかぐはしき紅蓮尼は、出羽國、象潟の商人の子なり。はじめ、父三十三所の觀音を拜み奉らむとて、ひとり、たびだちけるに、陸奥、松島の掃部といへる者も、同じ志にて、ひとりの旅なるに、ゆくりなく、道づれとなりて、いと、懇に、語らひ睦びけり。とかくするほどに、志遂げて、白河の關にて、別れむとして、互に、名殘惜みける時に、「われもほえず、かく、親み馴れぬるを、今、遠く、別れなば、また、逢ふ事も、知り難し。君一人の男子もたりと聞く。われ、一人の娘もたり。願くは、こを配せて、永く、好を結ばむ」と、いふ。掃部、悅び諾ひて、さて、わが家に歸れば、子の小太郎、わづらひて、はかなくなりぬとて、人々、かなしみあへり。夢うつゝとも、えわかず。先だたぬ心の闇にくれ惑ひて、日を

經つゝ、象潟へは、かくとも、告げざりけるに、幾程もなく、娘を送りれこせたり。掃部、うち驚き、「わが子は、はやく、みまかり侍りき。さるを、とく、告げざりし怠は、今はた、いかにかせむ。はかなき縁と思ひ、とく、歸りて、更に、良縁をもとめ給へ」と、いふに、女、うち泣きて、とみに、ものをもえいはず。ゑばしありて、「親々の許しゝ中は、未だ、對面も賜はらぬに、うせ給ひぬとも、猶、妹背とこそ思ひ侍れ。宿世つたなきは、いかにかせむ。今よりは、たゞ、亡靈に仕へ奉り、命終ふるまで、あだし心を思ひ侍らじ」とて、いかに、勸むれども、聽かず。遂に、止り居て、舅姑にも、孝を盡して、まめまめしきこと、たぐひなし。かくゑつゝ、年をへて、舅姑も、なくなりにければ、圓福寺の明極禪師の弟子となり、

頭れろして、名を紅蓮と改め、一向に、法の行のみにて、この世を終へけり。さて、小太郎の幼き時、常に、觀世音の御堂の邊にて、遊び戯れけるに、手づから、梅の一本を植ゑたるがあり。この尼、そを、亡夫の形見と忍びつゝ、その側に、庵して住みけり。ある時、その花の盛なるを見て、かなしみに堪へず、

移し植ゑし、花の主は、はかなきに、
　のきばの梅は、咲かずともあれ。

と、詠みけるに、またの年の春、この梅のみ、花咲かざりければ、尼、また、

さけかしな。今は主と、ながむべし。
　のきばの梅の、あらむかぎりは、

これより、春ごとに、もとの如く、花咲きけりとなむ。今、その庵を心月庵といふ。軒端の梅といへるは、猶、當時のを作りつぎ、植ゑつぎたるなり。又、その手ずさびに作りし煎餅といふもの、後に、その名をれほせて、こうれんといひしが、圓福寺より、歳毎に、國の守に獻る事、恒の例とはなれり。されども、今は、そのうせにし年月も、その墓のありかも、さだかならず。世いよ〳〵、遠く隔りなば、語りつぎ、聞きつぐこともなからむとて、江戸の人、宮下信教、圓福寺の中方禪師に謀りて、石に記して、永く、世に傳へむ事を願ふ。あな、めでたの志や。あな、よろこばしのわざや。（安田光則著光則文集）

一一、日野山の閑居

こゝに、六十の露、消えがたにれよびて、さらに、末葉のやどりを結べることあり。いはゞ、旅人の、一夜の宿をつくり、老いたる蠶の、繭をいとなむが如し。これを、中頃のすみかに、なぞらふれば、また、百分が一にだにもれよばず。とかくいふほどに、齢は、年々に、かたぶき、住家は、折々に、せまし。その家のさま、世の常ならず。廣さは、わづかに、方丈、高さは、七尺ばかりなり。處を思ひさだめざるが故に、地を占めて、つくらず。土居をくみ、打覆をふきて、つぎめごとに、かけがねをかけたり。もし、心にかなはぬことあらば、やすく、外に移さむがためなり。そのあらためつくる時、いくばくのわづらひかある。積むところ、

わづかに、二輛なり。車の力をむくゆる外は、さらに、他の用途いらず。

いま日野山の奥に、跡をかくして後、南に、假の日かくしをさし出して、竹のすのこを敷き、その西に、閼伽棚を作り、うちには西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日をうけて眉間のひかりとす。かの帳の扉に、普賢、ならびに、不動の像をかけたり。北の障子の上に、ちひさき棚をかまへて、黒き皮籠、三四合を置く。すなはち、和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。かたはらに、箏、琵琶、れのれの一張をたつ。いはゆる折箏、つぎ琵琶、これなり。東にそへて、蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて、夜の床とす。東の垣に、窓をあけて、こゝに、文机をいだせり。枕のかたに、すびつあり。これを、柴折りくぶるよすがとす。庵の北に、すこし、地を敷めて、あばらなるひめ垣をかこひて、園とす。すなはち、もろもろの藥草を植ゑたり。假の庵のありさま、かくのごとし。

その處のさまをいはゞ、南にかけひあり。岩をたゝみて、水をためたり。林の軒ちかければ、つまぎを拾ふに乏しからず。名を、外山といふ。正木のかづら、跡をうづめたり。谷ふかけれど、西は、晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は、藤浪を見る。紫雲のごとくして、西方にほふ。夏は、ほとゝぎすを聞く。かたらふごとに、死出の山路をちぎる。秋は、ひぐらしの聲、耳に滿てり。空蟬の世をかなしぶと聞ゆ。冬は、雪をあはれ

ぶつもり、消ゆるさま、罪障にたとへつべし。もし、念佛、ものうく、讀經、まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また、恥づべき友もなし。ことさらに、無言をせざれども、ひとり居れば、口業ををさめつべし。かならず、禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてかやぶらむ。もし、跡の白浪に、身をよするあしたには、岡のやに行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし、桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江をれもひやりて、源都督のながれをならふ。もし、あまりの興あれば、志ばし志ば、松のひゞきに、秋風の樂をたぐへ、水の音に、流泉の曲をあやつる。藝は、これ、つたなけれど、人の耳をよろこばしめむとにもあらず、ひとり志らべ、ひとり詠じて、みづから、心をやしなふばかりなり。

また、ふもとに、一の柴の庵あり。すなはち、この山守が居るところなり。かしこに、小童あり。時々來りて、あひ訪ふ。もし、つれづれなるときは、これを友となして、あそびありく。かれは、十六歳、われは、六十。その齡、ことの外なれど、心をなぐさむることは、これ、なじ。あるひは、つばなをぬき、岩なしをとる。又、ぬかごをもり、芹をつむ。あるひは、すそわの田井にれりて、落穗を拾ひて、ほぐみを作る。もし、日、うらゝかなれば、嶺によぢのぼりてはるかに、故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は、主なければ、心をなぐさむるに、さはりなし。あゆみ、わづらひなく、志、遠くいたる時は、これより、嶺つゞ

き、すみ山を越え、笠取をすぎて、あるひは、岩間にまうでつ
ひは、石山を拜む。もしは、又、粟津の原を分けて、蟬丸翁が跡を
とぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫の墓をたづね、かへるさ
には、をりにつけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の
實を拾ひて、かつは、佛にたてまつり、かつは、家づとにす。もし、
夜、ものがなれば、窓の月に、古人をしのび、猿の聲に、袖をうる
ほす。草叢の螢は、遠く、眞木の島のかがり火にまがひ、曉の雨
は、れのづから、木の葉吹く嵐に似たり。山鳥の、ほろほろと、鳴
くをきゝても、父か母かとうたがひ、峯のかせぎの、近くなれ
たるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。あるひは、埋火を
かきおこして、老のねざめの友とす。それそろしき山ならねど、

山高み人目も草も枯れぬれば
こだのこずゑを思ふ母かな
（三世千集　行基）

西行高野三詠
山ふかみ苔の一せぎのけ近さよ、
世を遠ざかる友で知らるゝ
老の寢ざめ
ふる事もすき間太を洗ふ
冬の夜ざめの友しまかぬ
（拾遺百首）

ふくろふの聲をあはれぶにつけても、山中の景色、折につけ
て、つくることなし。いはむや、深く思ひ、深く知られむ人のた
めには、これにしも、かぎるべからず。
大かた、このところに住みそめし時は、あからさまと思ひ
しかど、今、すでに、五とせを經たり。假の庵も、やゝ、ふる屋とな
りて、軒には、朽葉ふかく、土居に苔むせり。れのづから、事のた
よりに、都を聞けば、この山にこもり居て後、やんごとなき人
の、かくれ給へるも、あまた、聞ゆ。まして、數ならぬたぐひ、つく
して、これを、知るべからず。度々の炎上に、ほろびたる家、又、い
くばくぞ。たゞ、假の庵のみ、のどけくして、れそれなし。（方丈記）

山ふかみ人目も草も枯れぬれば
物思ひしきふくろふの声
（西行）

一二、鹿野山に登る記

むかしもろこし人はめでたき文をかゝむとては、まづ、天下の名たゝる海山をふみわたりて、わが氣を養へりとぞ。それのれ、そのひとしなみにあらねども、れとにきゝつる上總の高山に、のぼりて、あづまの國見せばやと、一人の友をいざなひ、蒸氣の船にのりて、八幡といふ處にわたりぬ。さて、二三日はひありきて、木更津をへて、鹿野山にゆきつきぬるは、志はずの晦日なりけり。あまたの里をへて、れのづからのぼる道なれば、さばかり、さかしきところはなけれども、道の中らより手引の車はかへしつ。高嶺までは、いま、一里ばかりもあらむといふあたりより、むら雲、まよひきて、雨、こぼれいづ。から

うじて、頂に至れば、四五百年は經ぬらむと見ゆる、大杉幾千本かあらむ、をぐらきまでに、生ひ茂りぬ。左の高峯に、白鳥の神社とて、日本武尊を、いはひまつれる社あり。右の木ぶかき森の中に、鹿野の山寺ありて、いと、ふるめかし。そのあたりに、人の家居七八十あるが中の、丸七といふ家に、やどりぬ。さて、見るに、雲霧は、軒端を埋めて、何のをかしげもなし。二人ともに、足たゆければ、湯あみ、夕飯くひて、例の物語してねぬ。こよひは、世にいふ、大晦日なり。京にあらば、鬼やらひして、豆うちまく夜なれども、田舍は、暦ことなれば、さるけはひもなし。夜なかばかりより、あらましき風のれとのみ、きこえたり。

あくるあした、つとめて、れきいづ。けふは、年のはじめの一

日なれば、例の神拜など、志をへて、鳥居岬といふところに、たちいでて見やれば、宵の嵐に、雲霧、なごりなう、はらはれて、海山、はるばると見わたさる。れほよそ、眼界は、十まり三國にれよべりといふげに、さもあらむかし。北の方に、遠く、空にそびえたるは、常陸の筑波山なり。すこし、左にさりて、雲間に見ゆるは、下野の二荒山なり。また、左に連りたるは、上野の赤城、榛名の山々なり。また、左に、いと、遠く、かすかに見ゆるは、信濃の淺間の嶽なり。また、西に、すこし、近げに見ゆるは、武藏の秩父嶺、多摩の横山なり。それに續きたるは、あふりの山なり。その間に、白う、遠く見ゆるは、甲斐の山々なるべし。さて、足柄、箱根のむら山を、ふもとにして、雲の上に、そゝりたてるは、富士の

高嶺なり。また、南にはなれて、聳えつるは、伊豆の天城山なり。また、左に、海をへだてゝ、烟のたちのぼるは、大島の峰なり。また、まぢかく、安房とこの國との堺を、たちきれるやうなるは、鋸山なり。それにつゞけるむら山は、東にめぐりて、五百重波のたてるが如し。九十九谷を、一目に、見れろすなどいへるも、そらごとにあらず。さて、この山々をめぐらしたる中に、平に、開けわたりつる國原は、新しき年の志るしにたちわたれる、霞の中に見えがくれして、八國の堺、いと、さだかならねど、あなめでたの國と見えたり。さるに、内海は、いと、大なるますみの鏡を、斜に、引きのべたらむやうなるに、朝日の、くまなく、輝きわたりて、かしこは、横濱、横須賀なるべし。このあたりは、三

浦三崎ならむ。むかひは、走水のわたりにて、觀音崎の燈臺も、手にとるばかりなるに、ゆきかふ大船小船の、眞帆片帆に見ゆるなど、筆にも、ことばにも、れよびがたし。あはれ、阪東の八國や、昔、遠天皇の詔して、「面には矢はたつとも、背には、矢はたてじと、言あげして、すめらが朝廷を、まもらふ東人こそ」と、の詔りたまひしも、志るく、後の世までも、つよ弓に、大矢をたぐひて、盾も、よろひも、たまるまじう、ふるまへる武夫ら幾千萬人かありし。鎌倉將軍が、この輩を撫でやしなひて、「天下の兵にたむかひても、力あまりあり」とこそ、ほこらひたりしか。されど、そは、昔の夢なりけり。今は、かけまくも、かしこき天皇の都を、東京に定めたまひて、大八洲の國内は、いふもさらなり、遙けき海の外なる、千よろづの國人も、うちなびき來て、つかへまつる御代にしあれば、弓も、劍も、ふくろにをさめて、ひたむきに、國も、民も、やすかれと、れきてさせたまふこと、こゝに、二十年あまり四年の新代となりぬ。むかしは、武を以て、つかへまつりしも、今は、文を以て、いそしむべき時なり。かゝる、遠白くさやけき、海山を見るにつけても、思ひあがらざらめや。（久米幹文著水屋集）

一三、山路の物語

布教のために、函館の港にまかるべき、れほせごと蒙りて、そこにありけるほど、福山なる開拓使の廳より、「また、こゝに

も」と、いひれこせければ馬に、鞍れきて、函館のやどりを出でたつ。年は、明治の六年、時は、七月の二日といふ日なりけり。かくて、山をこえ、川をわたり、磯邊を傳ひなどして、行くに、尻内の郷といふ處より、福山の郷までの間に、七里の山ごえあり。その山中には、たゞ、一二軒の家あるよし。げに、木だちは、くらく、山は、ふかく、なやましかる路ながら、駒にまかせて、のぼりゆく。

かくて、三里ばかりも來ぬらむと覺ゆるに、聞きしが如く、草の屋二軒あり。右の方なるは、家居のさま、いと、古く、もとより、こゝに住めりと見ゆ。左なるは、近きころ、住みつきたりと覺えて、れろそかながらに、ものの新しう見ゆ。火をこひて、煙草

ものせむと、馬よりれりて、家にいれば、いそぎあまりなる嫗と、はたちばかりなる女と、二人あり。主人とれぼしきは、見えず。さて、れのれを見て、かの嫗、いとも、ゐやゝかに、塵うち掃ひ、上座に、莚敷きて、けいめいしたり。かくて、下についゐて、「これにやすらひ給へ。かゝる深山の奥の伏屋なれば、さこそ、ものむづかしう、れぼしめすらめ」など、かひがひしう、火桶の灰、かきやりて、もて出でぬ。はたちばかりなるも、この嫗の志りへにつきて、いと、やさしげに、額づきぬ。

この家、すべてのさま、たゞならず。家内のものも、深山人とも、れぼえず。いかなる者ならむと、いぶかしさに、かなた、こなた、見めぐらせば、金紋まきたる鞍に、麻縄つけて、薪木れはす

る馬のになしたるさまなり。また、槍一つ、壁にものして、つゞれ衣うち掛けたり。かの謠曲といふものに見えたる、佐野の某が、隱家の心ちして、ゆかしう、れぼえつゝ、まづ、腰より、煙草とり出でて、くゆらすに、嫗の、はたちばかりの女に、「きこしめすべくもあらねど、茶、參らせよ」と、いふを、その女、手をつきて、「かしこまりぬ」と、ゐやび作りて、黑うなりはてたる釜のうちより、宇治山の木の芽の汁も、その釜の色にかよひたるを、汲み出でて、ものにするゑて、もてきぬ。

すべて、この女、嫗の、ものれほするごとに、必ず、手をつき、頭をたれて、うけたまはるさま、主從とれぼえたり。かく、ある人に、從者あらむも、いぶかしく、さてなむ、いよゝ、昔ゆかしきこ

こちして、れのれ、嫗に向ひて、「れのれらは、公事ありて、福山の方へ、まかる者なり。なめしかれど、見參らするに、世に後れ給ひて、かく、れはしますならむ。そもそも、いづこ、いかなる人に、れはしますらむ。かく申すれのれも、今は、公に仕へて、人がましき身にこそあれ、一度は、いとも、うちわびて、ゐなかずみせし事もあれば、思ひはかり參らせて、心苦しう、れぼえ侍るを」と、いふを聞きて、嫗の、「たゞ、煙草の火をとて、かう、けがしき伏屋のうち、訪はせ給ふだに、忝なう、やさしう侍るを、身のよすがなき事さへ、れぼしはかりて、問はせ給ふは、宿世、あやしう侍り。今は、何をか、つゝみ侍らむ。さきには、世々、松前氏に仕へて、その家人の長にもありけるを近きころ、君に放れ、夫に別

れ、たゞ一人、いまだ、はたちにも足らぬ、世嗣がねのわごのみ残りて、かう、やつやつしう、なりはて侍りぬ。わごも、家にあらば、君等のたちよらせ給ふを、さこそ、ほいあることに、思ひ給ふらめ。さきに、山かせぎにとて、出で立ち侍りか、りければ、なかなかに、深山の奥こそと、思ひ入りて、この山もとなる、民どものなさけにて、與へられたる、この小屋一つを、つゆのよすがに、住みつき侍り。さるにても、たのみなき身に侍るものから、これなる下女は、津輕のうまれにて、民子と申す者にて侍るが、十四の年より、召しつかひて、ことし、はたちになり侍り。見給ふ如く、折りたく柴のけぶりには、すゝけ侍れど、みめかたちけしうもあらず。さるが上に、わらは親子の仰する事、

いさゝかも、たがふる事なく、心をせめて、仕へ侍るからに、かかる身になりし時、いとま、とらせむとて、世を去りし夫が、物の底に、いさゝか、殘しれきたりし金のうち、三枚ばかりに、衣そへて、とらせ侍るを、この女、うち泣きて、こは、何事をか、のたまふらむ。十四のとしの春より、身に蒙りたる御惠は、山より高うはべるものを、今、かくなり給ふを見捨てまつりては、いづこにか、まかるべき。昔のまゝに、われはしまして、御心にかなはぬことしもあらば、暇をもたまはり、またさなくとも、年重ねたらむ後は親の許にも、まかりなむを、かう、御心細う、われはしますを、などか、うち置き奉らむ。山の奥、野の末までも、召し具したまへ。薪木こり、馬れひても、御手だすけをば、なしはべ

らむ」とて、うけひきはべらず。わらはも、うち泣きて、「その志は、忘るゝ世もなきまで、嬉しかれども、いま、花にひとしき身を、深山木の、色なきものと、なしはてむは、あたらしきわざならずや。とにも、かくにも、親の許にこそ」と、申し勸め侍りしを、この女、うち志をれて、「かくまで、申しても、ゆるしたまはずば、この深谷のそこに、身を投げなむより、せむ方はべらず。花の色香も、主の君の、春にあひ給ふ時にこそ、世にも匂はせまほしけれ。かく、なりはて給ひし上は、白髪の生ふるまで、この深山の奥の埋木とならむを」とて、思ひさだめて、見え侍れば、今は、とて、今日まで、かくて、さしれき侍り。われら、親子の、はかなさよりも、この女のうへを、あはれとだに見たまへ」と語り出で

て、涙とゞめあへず。

われのれも、れもほえず、旅の衣の袖志ぼりつゝ、「いとも、あはれに、いとも、めでたきこと、承るものかな。かう、世にありがたき人の上、ひろく、人にも聞かせ、世の女の、よき手本にこそ、なすべかりけれ。かまへて、かまへて、その志、失ひ給ふな。かゝる人を、いかでか、神の守りたまはぬ事あらむ。神の惠に、花さき匂はむ春も、必ず、あるべきを、身に志むらむ、朝夕の山風、いとひ給へ」と、慰めて、馬引きよせ、うち乘りけるを、老いたる、若き、二人ながら、送りいでて、袖をなむ、分ちぬる。布敎のためにとて、旅路をたどるこの身には、こがねにも、玉にも、まさる、これの山路の物語なりけり。（堀秀成著山路物語）

一四、諷諭二則

一、石清水詣

仁和寺にある法師、年よるまで、石清水ををがまざりければ、心うく覺えて、ある時、思ひ立ちて、たゞひとり、かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て、歸りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年ごろ、思ひつることは、たし侍りぬ。聞きしにも過ぎて、たふとくこそ、それはしけれ。そも、まゐりたる人ごとに、山へ登りしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へまゐることそ、ほいなれと思ひて、山までは見ず」とぞ、いひける。すこしのことにも先達は、あらまほしき事なり。（徒然草）

二、獅子狛犬

丹波に、出雲といふ處あり。大社を遷して、めでたく造れり。志太のなにがしとかや、志る處なれば、秋の頃、聖海上人、その外も、人、あまたさそひて、「いざ給へ。出雲をがみに。かいもちひ、めさせむ」とて、具しもて、いきたるに、れのれの、拜みて、ゆゝしく、信れこしたり。前なる獅子狛犬、背きて、うしろざまに、立ちたりければ、上人、いみじく、感じて、「あな、めでたや、この獅子の立てやう、いと、めづらし。深き故あらむ」と、涙ぐみて、「いかに、殿ばら、殊勝の事は、御覽じとがめずや。無下なり」と、いへば、れのれの、怪みて、「まことに、他に異りけり。都のつとに語らむ」など、

いふに、上人、猶、ゆかしがりて、れとなしく、物識りぬべき顔ま
たる神官を呼びて、「この神社の獅子の立てられやう、定めて、
習ある事に侍らむ。承らばや」と、いはれければ、「その事に候ふ。
さがなきわらはべどもの、つかまつりける、奇怪に候ふ事な
り」とて、さし寄りて、据ゑ直して、去にければ、上人の感涙いた
づらになりにけり。（徒然草）

一五、玉づさ四篇

一、小澤蘆庵主のもとに

千さとをへたで待れど、こゝらのとし月、まのあたり、かた
らひかはし侍る心ちせらるゝまゝに、うちづけなるものか

ら、たちかへる春のほぎこと聞え侍り。「君もわれも、もゝ世を
へつゝ、花鳥に、あくやあかずや、いざこゝろみむ」。ものみなは
とかむ月六日の日（橘千蔭）

二、人のもとより氷をれくれるに

つちさへ裂くとかいふなるは、暮まつほども、いと、待遠な
るに、折しも、やんごとなきあたりより、わかち給へるなりと
て、暑さ忘れむ料にとて、賜れるは、いと、めづらかになむ。まづ、
手にとり侍るだに、そゞろ寒きまでれぼえ侍り。わらはども
は、めでくつがへり侍りて、ひたひにのせ、胸にあてなどまつ
つ、もて興じ侍るも、をかしうなむ。されど、こは、れほやけのれ
ものにも供へ侍ると聞くなるを、いぶせき伏屋の、心やりぐ

さになし侍らむは、なかなかに、かしこきわざなりや。とまれかくまれ、御まのあたりにこそ、よろこびは、聞えつべけれ。

手にとるも、あなめづらしな。あつ氷、
遠きづけ野の、むかしれぼえて、

（村田春海）

三、月の夜友のもとに

いざたまへ。もろともに。この月のさやけきを、所せきつぼのうちにのみやは、見はて侍らむ。なにがしが、なりどころにまからむ。それもまらうどなどきあひて、あるじまうけする程ならば、それがしのかくれがにまからむ。それも、ありきたがひてあらぬほどならば、北山の律師の室を驚し侍らむそれも、もし、里にれりたらむほどならば、うしろの山にのぼりて、夜もすがら、めであかさむを、いざたまへ。もろともに。

なべて世の塵をよそなる、高山の、
松のこずゑの、つきをいざ見む。

そめいろの峯までもこそ。（清水濱臣）

四、雪の朝友のもとに

今朝のけしき、めづらしく御覽ぜずや。冬になるより、いつしかとのみ、日毎に、待ちわたり侍りしに、昨日のゆふべ、風、いたく、吹きあれ、雲のたゝずまひも、いみじく、さえわたりて、飛ぶ鳥のけしきまで、必ず、降りぬべき空とは見えしかど、いと、かくまで深くとは、思ひ給へざりきかし。あけくれ、心へだて

ぬ友どちは、かゝらぬをりだに、何事につけても、まづ、思ひ給へ出でらるゝわざなるを、まして、かく、めづらかなる朝ぼらけを、心なき身の、ひとりのみ見侍らむことの、いと、あたらしく思ひ給ふれば、よし、跡つけても、人の訪ひ給はましかば、こよなく、をかしさも、まさりぬべきものをと、思ひ給ふるに、いかにとだに、音づれも志給はぬは、いと、思はずに、うらめしくなむ。この景色、さりとも、見過しがたくは、れぼさるらむものをとは、思ひやり聞えさすれど、志ろしめすやうに、いと、うひうひしき口には、何事をもいはれ侍らず。筆の志りとる博士だに侍らで、とりつくろひ侍らむやうも侍らねば、思ひ給ふるほどの心も、たゞ、れしこめてなむ。そこには、いかに、見どこ

ろある、心ふかき言の葉、多く、ものし給ふらむ。一つ二つたまはせよかし。さてなむ、せばき庭の雪の光もくはゝりて、友なき今朝のさうざうしさをも、慰め侍らむ。いでや、かく、聞えさするも、もとより、あやしき鳥の跡の、今朝は、いとゞ、筆のさき、志みこほりてはべれば、御覧じわくかたも侍らずや。あなかしこ。（本居宣長）

一六、庭萩（橘千蔭）

秋風の、
遠方の、
咲きみだれ、
たちにし日より、
野邊の八千くさ、
蟲の音きそひ、

五百志ろや、千志ろの田のも、
ほにいでて、雁わたるらし、
れも志ろき、時のさかりを、
れしてるや、難波のうらの、
あしのけに、なびきこひ伏し、
飛ぶ鳥の、翅しあらねば、
いたづらに、せむすべをなみ、
こもりゐて、歎かひくらし、
床のべに、いぬるあひだに、
さにづらふ少女のともが、
志らたまの、玉かつらかけ、

むらさきの、綾ごろもきて、
こまにしき、紐をゆひたり、
手にまける、玉もゆらゝに、
志きたへの、わがまくらべに、
つどひきて、志かな歎きそ、
みめぐみの、つゆをば受けて、
生ひたちし、ことわすれめや、
いまよりは、御そばさらで、
あさよひに、わがなぐさめむ、
志るしなき、ものなもひそと、
をとめらが、かたらひをると、

見しいめの、　さめつゝ見れば、
にしき綾に、　つゝめる子らは、
ませのうちの、　つゆにあらそふ、
秋萩の花。

一七、祭のことば

こゝに、文化の五とせ、九月八日、平春海、謹みて、芳宜園大人のれくつきの御前に、菊の初花、一枝をたむけ、香の木、一ひらをたきて、うなねつきて、申さく。あはれ、悲しきかも。君は、われに、十といひて、一とせの、このかみにれはすなるが、今、そのかみを思ひ出づるに、君は、まさに、さかりの齢にれはして、われ

は、まだ、童にてぞ侍りける。常に、縣居の庭に、物まなびにゆきかひたる時、朝にまゐるとては、君の御はかしの後に從ひ、夕にまかるとては、君の御袖のもとにすがりて、あひうるはしみまつれること、親子はらからにても、なにか、ことならむ。書よむとては、君を、師ともたふとみ、歌作るとては、われを、れとひのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君は、つかへの道に暇なくれはし、われは、世のさがにかゝづらひて、れのづから、疎き方にも過ぎつるを、君、つかへを退き給ひて後は、われも、同じ衢にうつり住めば、花をたづぬとては、われ、道志るべをなし、月を思ふとては、君が舟に、あひ乘り、うきことも、ともに、うれへ、うれしきふしも、ともに喜びて、世にありふるわざ

の、まめごとも、あだごとも、かたみに、へだてなく、心をかはせること、今にはたとせ。そのはじめをくりかへし數ふれば、あひ友たること、既に、五十とせにぞあまりける。さるを、今、れくれ奉りて、いつの世にか、あひ見む。いづれの時にか、ことゝはむ。つねなきは、人の身のならひぞと知るも、これを、いかでか、歎かざらむ。かゝるを、誰かは、よく堪へむ。あはれ、悲しきかも。

文の林、世々に衰へ、言の葉の道、日々に下り行けるを、賀茂の翁、世に出で、今を捨てゝ、古にかへり、青雲の高き心志らひを求め、志づ機の、あやなるみやびごとを尊みいへれど、株を守り、舟にきだつくるともがら、かれになづみ、こゝにひかれて、猶、あやしみ咎むるたぐひはれほく、たまあひて、よく、うけひく人なむ稀なりしを、君ひとり、心をれこして、あまねく、さとし、ひろく、誘ひしより、ちかき人は、まのあたり、あひらづなひ、とほき人は、はるかに、なびき來て、古ぶりの歌、世にさかりになりにたるは、まことに、君の力によりてなり。その、みづから、よみ出で給へる歌を見るに、ふるき調、新しき姿、とりどりに、備らざるなし。その古をうつせるは、藤原、寧樂の御世にれよび、後の巧に習へるは、堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふことは、口に盡さゞる事なく、目に觸るゝものは、詞にのぼせざることなむあらざりける。これを見て、高きも、短きも、愛で尊ばざる人なし。また、事ごのみの人は、その名を、君に知られては、身のれもてれこしと思ひて、世にも誇り、君の一歌を得る

は、「價なき寶にもかへじ」といひてぞ、深く、喜びける。さるを、今、金の聲、忽ち、止みて、玉の響、再び、きこえずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大方の世人の憂ともいひつべし。これを、いかでか、惜まざらむ。かゝるを、誰かは、またはざらむ。あはれ、悲しきかも。わが、かく、ことあげするを、泉の下にも、さやかに、きこし召し、天がけりても、はるかに、みそなはせとなむ申す。（村田春海著琴後集）

一八、はれぬ雲

吉野の行宮にて、うへのをのこども、題をさぐりて、歌讀み侍りける次に、五月雨といふことを、よませたまひける、

後醍醐天皇御製

都だに、さびしかりしを、くもはれぬ、
　よし野のわくの、五月雨の頃。

題ならず、　後村上天皇御製

鳥のねに、れどろかされて、あかつきの、
　ねざめまづかに、世を思ふ哉。

百首歌中に、　冷泉入道前右大臣

身のよそに、たち別れても、戀しきは、
　みはしのはなの、昔なりけり。

鶯中百首の歌に、菖蒲を、　中務卿宗良親王

あやめひく、今宵ばかりや、思ひやる、
みやこもくさの、枕なるらむ。

文貞公、あづまのかたへれもむきはべりける時、れなじやうにくだりける人々、道にて、あまたうせはべりけるよし、傳へ聞きてよめる、　妙光寺内大臣母

めぐりあふ、契ならずば、なかなかに、
うきを見はてぬ、命ともがな。

勢多の橋をすぐとて、　權中納言具行

けふのみと、思ふわが身の、夢の世に、
わたるもつらし。せたの長橋。

題志らず　大藏卿在仲

故郷に、たちかへるとも、いまはまた、
むかしを語る、友やなからむ。

ある野原の中にて、夜をあかしけるに、秋の末つかたなれば、蟲のこゑごゑ、きほひなくを聞きて、思ひつゞけ侍りける、　文貞公

いにしへは、つゆわけわびし、蟲の音を、
たづねぬくさの、枕にぞきく。

後醍醐天皇の御陵に、詣でたまひて、よませ給ひける、　新待賢門院

さびしさも、つひのすみかと、思ふには、

こゝろぞとまる。みねの松風。

（新葉和歌集）

一九、新島守その一

四月廿日、帝（順德天皇）れりさせ給ひ、春宮、四つにならせ給ふに、譲り申させ給ふ。近ごろ、皆、この御齢にて、受禪ありつれば、これも、めでたき御行末ならむかし。同じき廿三日、院號のさだめありて、今、れりさせ給へるを、新院ときこゆれば、御兄の院（土御門院）をば、中院と申し、父みかど（後鳥羽院）をば、本院とぞきこえさする。このほどは、家實のれとゞ、（普賢寺殿の御子）關白にて、れはしつれど、御譲位の時、道家のれとゞ、（光明峰寺殿）攝政になり給ふ。かのあづまの若君（頼經）の御父なり。

さても、院のれぼしかまふること、志のぶとすれど、やうやう、漏れきこえて、ひがしざまにも、その心づかひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀の判官光季といふものあり。かつがつ、かれを、御勘じのよし仰せらるれば、御方にまゐるつはものどもれしよせたるに、のがるべきやうなくて、腹切りてけり。まづ、いとめでたしとぞ、院はれぼしめしける。東にも、いみじう、あわてさわぐ。さるべくて、身のうすべき時にこそあなれと、思ふものから、討手の、攻めきたりなむ時に、はかなきさまにて、屍を曝さじ。れほやけと聞ゆとも、みづから、志たまふことならねば、かつは、わが身の宿世をも見るばかりと、思ひなりて、れとうとの時房と、泰時といふ一男と、二人を頭とし

て、雲霞の兵をたなびかせて、都にのぼす。泰時を、前にすゑて、いふやう、「れのれを、このたび、都にまゐらするは、思ふところ多し。本意の如く、清き死をすべし。人に、うしろ見えなむには、親の顔、また、見るべからず。今をかぎりと思へ。いやしけれども、義時、君の御ために、うしろめたき心やはある。されば、横ざまの死をせむことは、あるべからず。心をたけく、れもへ。れのれ、うち勝つものならば、二たび、この足柄、箱根はこゆべし」など、なくなく、いひきかす。まことに、志かなり。又、親の顔、をがむ事も、いと、あやふしと思ひて、泰時も、鎧の袖を志ぼる。かたみに、今やかぎりと、あはれに、心細げなり。かくて、うち出でぬる又の日、思ひかけぬほどに、泰時、たゞひとり、鞭をあげて、馳せきたり。父、むねうちさわぎて、「いかに」と、問ふに、「軍のあるべきやう、大かたのれきてなどは、仰のごとく、その心をえ侍りぬ。もし、道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく、凰輦を先だてゝ、御旗をあげられ、むこうのげんぢうなる事も侍らむに、まゐりあへらば、その時の進退、いかゞ侍るべからむ。この一ことを、たづね申さむとて、ひとり、馳せ歸り侍りき」と、いふ。義時、とばかり、うち案じて、「かしこくも、問へるをのこかな。その事なり。まさに、君の御輿に向ひて、弓をひくことは、いかがあらむ。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦をきりて、ひとへに、かしこまりを申して、身をまかせたてまつるべし。さはあらで、君は、都にれはしましながら、軍兵をたまはせば、命を捨、

てゝ、千人が、一人になるまでも、戰ふべし」と、いひもはてぬに、いそぎ立ちにけり。

都にも、れぼしまうけつる事なれば、ものゝふども、召しつどへ、宇治、勢多の橋もひかせて、かたきを防ぐべき用意、ことなり。公經の大將ひとりのみ、御うまごのことも、さる事にて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は、故大將のはらからなれば、一かたならず、あづまを重くれぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕き事と、あぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又、修明門院の御はらからの、甲斐の宰相中將範茂など、つぎつぎ、あまたきこゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじりたつ人々、この外の上達部にも、殿上人にも、あまたありき。

御修法ども、數ましらず、行はる。やんごとなき顯密の高僧も、かゝる時こそ、たのもしきわざならめ。れのれの、心をいたして、つかうまつる。御みづからも、いみじう、ねんぜさせ給ふ。日吉の社に、忍びて、詣でさせ給へり。大宮の御まへに、夜もすがら、御念誦ましく給ひて、御心のうちに、いかめしき願どもを立てさせ給ふ。夜、すこし、ふけ靜りて、御社、すごく、燈籠の光、かすかなるほどに、幼き童の臥したりけるが、俄に、れびえあがりて、院の御前に、たゞまゐりに、はしりまゐりて、託宣しけり。「かたじけなくも、かく、わたりれはしまして、うれへ給へば、聞きす

ごしがたく侍れど、一とせの御輿ぶりの時、なさけなく、防がせ給ひしかば、衆徒、れのれを恨みて、陣のほとりに、ふりすて侍りしかば、むなしく、馬牛のひづめにかゝりし事は、今に、怨めしく、思ひ給ふるにより、このたびの御方人は、えつかうまつり侍るまじ。七社の神殿を、こがね志ろがねに、みがきなさむと、うけたまはるも、もはら、承け侍らぬなり」と、のゝしりて、息も絶えぬるさまにて、伏しぬ。きこしめす御心ち、物に似ず、あさましうれぼさるゝに、たゞ、御涙のみぞいで來る。過ぎにしかた、くやしう、とりかへさまほし。さまざま、怠りかしこまり申させ給ふ。山の御輿、防ぎたてまつりけむこと、かならずしも、御みづから、れぼしよるにはあらざりけめど、「責、一人に」と、いふらむ事にやと、あぢきなし。中院は、あかで、位をすべり給ひしより、言にいでてこそものしたまはねど、世の、いと、心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊に、まじらひたまはざめり。新院は、れなじ御心にて、よろづ、いくさの事なども、捉てれほせられけり。

二〇、新島守その二

いつのとしよりも、五月雨、はれまなく、富士川、天龍など、えもいはず、漲りさわぎて、いかなる龍馬も、うちわたしがたければ、攻めのぼる武者どもゝ、あやしく、なやめり。かゝれども、遂に、都にちかづくよし、きこゆれば、君の御武者も、いでたつ。

その勢、六萬餘騎とかや。宇治、勢多へ分ちつかはす。世の中、ひびきのゝしるさま、言の葉もれよばず、まねびがたし。あるは、ふかき山へ逃げこもり、とほき世界に落ちくだり、すべて、やすげなく、騒ぎみちたり。いかゞあらむと、君も、御心みだれて、れぼしまどふ。かねては、たけく見えし人々も、誠のきはになりぬれば、いと、心あわたゞしく、色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月廿日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂に、みかたのいくさ、やぶれぬ。あら磯に、たか潮などの、さしくるやうにて、泰時と、時房と、みだれ入りぬれば、いはむかたなくあきれて、上下、たゞ、物にぞあたりまどふ。

あづまより、いひれこするまゝに、かのふたりの大將軍、はからひれきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷したてまつるべしとき、こゆれば、女院、宮々、所々に、れぼしまどふ事、さらなり。本院は、隱岐國にれはしますべければ、まづ、鳥羽殿へ、網代車の、あやしげなるにて、七月六日、いらせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましう、あはれなり。「ものにもがなや」と、れぼさるゝも、かひなし。その日、やがて、御ぐしれろす。御とし、四そぢに、一つ二つやあまらせ給ふならむ。まだ、いと、をしかるべき御ほどなり。信實朝臣召して、御すがた、うつしかゝせらる。七條院へたてまつらせ給はむとなり。かくて、れなじ十三日に、御舟にたてまつりて、遙なる波路を志のぎれはします御心ち、この世の同じ御身とも、れぼされず。いにし

へ、いかなりける、代々の報にかと、うらめしく、新院も、佐渡國に遷らせ給ふ。まことや、七月九日、帝（仲恭天皇）をも、れろしたてまつりき。この卯月かとよ、御讓位とて、めでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にて、れり給へるためしも、これや始なるらむ。「もろこしにぞ、四十五日とかや、位にれはする例ありけるとぞ、からのふみ讀みし人の、いひし心ちする。それも、かやうの亂やありけむ。さて、上達部、殿上人、それより下、はた、殘るなく、この事に觸れにしたぐひは、重く、輕く、罪にあたるさま、いみじげなり。中院は、はじめより、ものしめさぬ事なれば、あづまにも、とがめ申さねど、父の院、遙に、うつらせ給ひぬるに、のどかにて、都にあらむ事、いと、れそれありと、れぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐國の幡多（はた）といふ處にわたらせ給ひぬ。去年のきさらぎばかりにや、わか宮、いでき給へり。承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くてうせ給ひにし人のむすめの御はらなり。やがて、かの宰相のれとうとに、通方といふ人の家に、とゞめたてまつり給ひて、近くさぶらひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ、御とも、つかうまつりける。いと、あやしき御手輿にて、くだらせ給ふ。みちすがら、雪かきくらし、風ふきあれ、ふゞきして、來しかた、ゆくさきも見えず、いと、堪へがたきに、御袖も、いたく、こほりて、わりなきこと、多かるに、

浮世には、かゝれとてこそ、生れけめ。

ことわり知らぬ、わがなみだかな。

「せめて、近き程に」と、あづまより奏したりければ、後には、阿波國に遷らせ給ひき。

さて、このたび、世の有樣、げに、いと、うたて、くちをしきわざなり。あるは、「父の王をうしなふためしだに、一萬八千人までありけり」とこそ、佛も說き給ひたためれ。まして、世くだりてのち、もろこしにも、日の本にも、爭ひて、戰をなすこと、數へつくすべからず。それも、皆、ひとふし、二ふしのよせはありけむ。もしは、すぢことなる大臣、さらでも、れほやけともなるべきざみの、すこしのたがひめに、世にへだたりて、その恨のすゑなどより、事れこるなりけり。今のやうに、むげの民とあらそひて、君のほろび給へるためし、この國には、いと、あまたも、聞えざめり。されば、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも、皆、たけかりけれど、宣旨には、勝たざりき。保元に、崇德院の、世を亂り給ひしだに、故院（後白河院）の御位にて、うちかち給ひしかば、「あまてらす大御神も、御裳濯川のれなじ流と申しながら、なほ、時のみかどを、守りたまはすることは、つよきなめり」とぞ、ふるき人々も聞えし。又、信賴の衞門督、れほけなく、二條院をれびやかしたてまつりしも、遂に、空しき屍をぞ、道のほとりに、棄てられける。かゝれば、ふりにし事を思ふにも、猶、さりとも、いかでか、三皇、今上、あまた、れはします王城の、徒に、ほろぶるやうやはあらむと、たのもしくこそ、れぼえしに、かく、

いと、あやなきわざの出できぬるは、この世一つのことにもあらざらめども、まよひのれろかなるまへには、猶、いと、あやしかし。四つにて、位につき給ひて、十五年れはしましき。れり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ、天の下には、れなじ事なりしかば、すべて、三十八年が程、この國のあるじとして、萬機のまつりごとを、御心ひとつにをさめ、百の官をたがへ給へりし。そのほど、吹く風の、草木をなびかすよりもまされる御ありさまにて、遠きをあはれみ、近きをなで給ふ御めぐみ、雨の脚よりも、ちげければ、津の國のこやの、ひまなきまつりごとをきこしめすにも、難波のあしの、亂れざらむことをれぼしき。藐姑射の山の峯の松も、やうやう、枝をつらねて、千代に、八千代をかさね、霞のほらの御住居、いく春をへても、そらゆく月日の、かぎりもしらず、のどけくれはしましぬべかりける世を、ありありて、よしなき一ふしに、今は、かく、花の都をさへたちわかれ、れのがちりぢりにさすらへ、磯のとまやに、軒をならべて、れのづから、ことゝふものとては、浦につりするあま小舟、もしほやく烟のなびくかたをも、わがふる郷のもるべかとばかり、ながめすごさせ給ふ。御すまひどもは、それまでと、月日をかぎりたらむだに、あすもらぬ世のうしろめたさに、いと、心ぼそかるべし。まして、いつをはてとか、廻りあふべきかぎりだになく、雲の浪、けぶりの浪の、いくへとももらぬ境に、世を過し給ふべき御さまども、口惜しとい

ふも、れろかなり。

二一、新島守その三

このれはします處は、人ばなれ、里遠き志まの中なり。海づらよりは、すこし、ひき入りて、山かげにかたそへて、大きやかなるいはほの、そはだてるを、たよりにて、松の柱に、あしふける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。まことに、柴のいほりの、たゞ、志ばしと、かりそめに見えたる、御やどりなれど、さるかたに、なまめかしく、ゆゑづきて、志なさせ給へり。水無瀬殿、れぼし出づるも、夢のやうになむ。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外も、のこりなき心ちする、今さらめきたり、

志ほ風の、いと、こちたく、吹き來るを、きこしめして、

われこそは、新島もりよ。れきの海の、
あらきなみかぜ、こゝろして吹け。

同じ世に、またすみのえの、月や見む。
けふこそよそに、れきの志まもり。

年も歸りぬ。所々、うらうら、あはれなることをのみれぼしなげく。佐渡院、あけくれ、御行をのみ志給ひつゝ、猶、さりともとれぼさる。隱岐には、浦よりをちの、はるばると、霞みわたれるそらを、ながめ入りて、過ぎにし方、かきつくし、れもほしいづるに、ゆくへなき御涙のみぞ、とゞまらぬ。

うらやまし。長き日影の、春にあひて、

ほ汲むあまも、そでやほすらむ。

夏になりて、かやぶきの軒端に、五月雨のぢづく、いと、ところせきも、御覽じなれぬ御心ちに、さまかはりて、めづらしく、れぼさる。

あやめふく、萱が軒端に、風過ぎて、
どろにれつる、むらさめの露。

はつ秋風のたちて、世の中、いとゞ、ものがなしく、露けさまさるに、いはむかたなく、れぼしみだる。

故郷を、わかれ路にれふる、葛の葉の、
きは來れども、かへる世もなし。

たとしへなく、ながめをれさせ給へるゆふぐれに、沖のかたに、いと、ちひさき木の葉のうかべると見えて、漕ぎくるを、あまの釣舟かと御覽ずるほどに、都よりの御せうそこなりけり。墨染の御ころも、夜の御ふすまなど、都の夜さむに、思ひやりきこえさせ給ひて、七條院より參れる、御ふみ、ひきあけさせ給ふより、いと、いみじく、御むねもせきあぐる心ちすれば、やゝ、ためらひて、見給ふに、「あさましくも、かくて、月日へにける事、けふあすとも、をらぬ、命のうちに、今一たび、いかで、見たてまつりてしがな。かくながらは、死出の山路も、こえやるべうも侍らでなむ」など、いと、れほく、みだれがき給へるを、御かほに、れしあてゝ、

垂乳根の、消えやらで待つ、露の身を、

かぜよりさきに、いかでとはまし。

八百よろづ、神もあはれめ。垂乳根の、

われ待ちえむと、たえぬたまのを、

はつ雁のつばさにつけつゝ、こゝかしこより、あはれなる御消息のみ、常は、たてまつるを、御覽ずるにも、あさましう、いみじき御涙のもよほしなり。家隆の二位は、新古今の撰者にも召し加へられ、れほかた、歌の道につけて、むつましく、召しつかひし人なれば、よるひる、戀ひきこゆる事、かぎりなし。かの伊勢より、須磨にまゐりけむも、かくやとれぼゆるまで、卷きかさねて、かきつらねまゐらせたる、「和歌所の昔のれもかげ、かずかずに、わすれがたう」など、申して、つらき命の、けふまで

侍ること、うらめしきよしなど、えもいはず、あはれれほくて、

寢覺して、きかぬをきゝて、わびしきは、

あらいそなみの、あかつきのこゑ。

と、あるを、法皇も、いみじとれぼして、御袖、いたく、志ぼらせたまふ。

涙まなき、れきの小島の、はまびさし、

ひさしくなりぬ。みやこへだてゝ、

木がらしの、れきの杣山、ふき志をり、

あらく志をれて、ものれもふころ。

をりをり、よませ給へる御歌どもを書きあつめて、修明門院へ奉らせ給ふ。その中に、

水無瀨山、わが故里は、あれぬらむ。
　まがきは野らと、人もかよはで、
かざしをる、人もあらばや、言とはむ。
　れきのみやまに、杉はみゆれど、
限あれば、さてもたへける、身のうさよ。
　民のわらやに、のきをならべて、

（增鏡）

訂正中等國語讀本卷十終

明治三十六年十一月廿四日訂正廿六版印刷
明治三十六年十一月廿七日訂正廿六版發行
明治三十七年八月十五日三十版發行

訂正中等國語讀本奥附
定價表　一ヨリ十マデ各貳拾六錢　附錄三拾錢

明治三十六年十一月廿八日
中學校用文部省檢定濟

著作權登錄濟

著者　東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地　落合直文
發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　三樹一平
印刷者　東京市神田區三河町二丁目十六番地　鈴木友三郎
印刷所　東京市神田區雉子町三十四番地　宮本印刷所

發行所　東京市神田區錦町一丁目（特電話本局二四三八番）　明治書院
關西專賣　大阪市東區備後町四丁目（特電話東四三番）　吉岡平助